

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第 22 期ゼミ長 館野陽向

人生において、私が下した最もすぐれた決断は、小野ゼミへ入ゼミしたことである。私は、こう強く断言できる。もし、もう一度入ゼミ試験を受け直すことができたとしても、私は他のゼミではなく、小野ゼミを選ぶであろう。ではなぜ、私がここまで小野ゼミに強く惹かれるのか、この巻頭言を執筆するにあたり、自分なりに思考を巡らせてみた。ゼミ生に美男美女が揃っているからか、20年以上の歴史を持つ伝統的なゼミであるからか。これらも小野ゼミの持つ魅力ではあるものの、私が小野ゼミに惹かれる理由としてはしっくりこない。あれでもない、これでもないとしばらく考えた後に、私は、結論にたどり着いた。私が、小野ゼミに強く惹かれるのは、ひとえに、このゼミが慶應義塾大学のゼミの中でも屈指のエグゼミであるからなのだ。

ところで、読者諸君は、「エグイ」という言葉に対して、どのようなイメージを持っておられるだろうか。「エグイ」という言葉は、苦味や酸味、アクの強さなどを表す「えぐみ」という言葉から派生された言葉で、元来、喉を刺激するような味覚や、どぎついさまといったことを意味する。それゆえ、この言葉に対してマイナスなイメージを持つ人も少なくないであろう。実際、入ゼミ活動において交流した何人かの2年生は、「エグそうだから小野ゼミに入るのは不安だ」という言葉をこぼしていた。しかしながら、エグゼミに所属することは、果たして自分にとってマイナスに作用することなのであろうか。そんなわけがない。小野ゼミでの2年間の活動を通して、そのエグさから、くじけそうになってしまう場面はあったが、それよりもはるかに多く、小野ゼミに入って良かったと心から思える場面が幾度もなくあった。エグゼミであるということは、そのエグさの分だけ、コミットしがいがあるゼミであるということだと思う。既存文献レポート、多変量解析レポート、ディベート活動、ビジネスコンテスト、三田祭論文執筆、そして、卒業論文執筆といった小野ゼミのコンテンツは、たしかにどれもエグかった。しかし、小野ゼミで私たちを待ち受けていたのは「エグイ」コンテンツだけではなかった。小野ゼミには、私たちが慕ってくれる後輩、支えてくださる先輩、そして、愛のあるご指導をくださる先生がいたのである。果たして、深夜まで議論を交わし、時には一つ屋根の下で夜通し共に作業する後輩、夜中の2時に招待用のリンクを送ったのにもかかわらず、ノータイムでzoomに参加していただき、嫌な顔一つせず、相談に乗ってくれる先輩、私たちの未熟さゆえに、数えきれないほどのご迷惑をおかけしてしまっているにもかかわらず、提出した原稿を昼夜問わず添削してくださる指導教授は、果たしてエグゼミ以外のゼミにいるのであろうか。実は、現代において、「エグイ」という言葉は、刺激が強く印象的であるさまなどとして、元来のマイナスの意味に限らず、プラスの意味で使われることもあるという(佐久間淳子(2019),「変化する日本語「えげつない」の今を捉える」、『応用社会学研究』(立教大学),第61巻, pp.245-253.)。小野ゼミで私たちは、「エグイ(+)」後輩、「エグイ(+)」先輩、および「エグイ(+)」先生に助けられながら、ゼミ活動を進めてきた。

そうした私たちのゼミ活動の集大成となる一冊が、この『慶應マーケティング論究』第22巻である。本

論文集には、我々第22期生たちが小野ゼミでの活動を通して得たすべての経験を活かして取り組んだ各人の卒業論文をはじめ、第22期生のデビュー作である三田祭論文、全員で知恵とアイデアを振り絞って立案したビジネスコンテストのプランなどが取められている。本論文集は、第22期生の2年間にわたるゼミ活動の軌跡そのものである。

本論文集の完成は、多くの方々の支えをなくしては、決して実現しえなかったであろう。末筆ながら、この場をお借りして、私たちの活動を支えてくださった方々に対する感謝の言葉を綴らせていただきたい。

まずは、第23期生の後輩へ。先輩としてその力量や配慮が足りず、みんなに迷惑をかけてしまったことが多々あったと思います。特に、秋学期においては、私たちの論文がいつまでたっても完成しないばかりに、第23期三田祭論文の執筆を十分にサポートすることができなかったと思います。本当にごめんなさい。それでもなお、こんな不甲斐ない私たち第22期生に1年間ついてきてくれて本当にありがとう。みんなから慕ってもらえる先輩であり続けられるように私たちも日々精進します。

次に、第21期OBOGの皆様へ。先輩方には、幾度となく相談に乗っていただき、たくさんの助言をいただきました。先輩方が卒業してからは、私たちを支えてくださったその大きな背中を思い浮かべ、私たち自身も先輩方のような存在になれるよう、ゼミ活動に取り組んできました。私たちの成長は、先輩方の支えなくしてはありえません。先輩方は、いつまでも私たちの憧れの存在です。本当にありがとうございました。

さらに、大学院生としてご指導くださった王 珏さん(第18期大学院OG)、北澤涼平さん(第16期OB・第20期大学院生)、および 嘉寧さん(第22期大学院生)へ。これまで、私たちのゼミ活動を支えていただきありがとうございました。大学院生の皆様の丁寧なご指導があったからこそ、研究者として未熟な私たちが、本論文集を完成させるまでに至ったと思います。本当にありがとうございました。

そして、第22期生のご家族の皆様へ。帰りが遅くなり、ご心配やご迷惑をおかけしてしまったことが多々あったと思います。それでも、皆様の支えがあったからこそ、私たちは小野ゼミでの活動に全力を注ぐことができました。2年間、私たちの活動を見守っていただき、本当にありがとうございました。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生へ。様々な面で大変未熟な私たちに対して、決して愛想をつかすことなく、2年間熱心にご指導してくださった小野先生には、感謝してもしきれません。ご自身の研究や校務でお忙しい中にもかかわらず、私たちの相談に乗っていただいたことや、指摘をいただいてもケアレスミスがなくなる私たちの稚拙な原稿を何度も添削していただいた御恩は、一生涯忘れません。先生からの愛あるご指導一つひとつが、今日に至るまでの私たちの成長のきっかけとなっています。社会に出てからも、先生の言葉や小野ゼミで経験した成功や失敗を決して忘れることなく、それらを糧にして、成長を続けたいと思います。そして、一人ひとりが、先生の自慢の教え子となるように、先生からいただいた御恩をそれぞれの持ち場で活躍する形で還元することが、今の私たちの目標です。これまで本当にありがとうございました。

2026年1月吉日